

機関番号：14101

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2010

課題番号：20530850

研究課題名（和文） 授業スタイルの形成と「教師文化」――ライフヒストリー的アプローチを用いて――

研究課題名（英文） Making of Teaching Style and "Teacher Culture" -using life history approach――

研究代表者

森脇 健夫 (MORIWAKI TAKEO)

三重大学・教育学部・教授

研究者番号：20174469

研究成果の概要（和文）：

教師の力量形成を授業スタイルの形成ととらえ、授業スタイルの形成に「教師文化」（例えば学校文化や教師の自主的なサークルの文化）などが影響するかについて、その教師のライフヒストリーを追うことによって明らかにした。

結論を一般化することはできないが、ある自主的な教師サークルに属する教師へのインタビューによれば、そのサークルの文化（例えば、教育技術を共有する、とか地域学習の単元を協同でつくりだす）ことが自分自身の授業スタイル形成に上で決定的な影響を与えていることが明らかになった。とくにそれは実践報告を通してというよりは、一緒にフィールドワークし、授業をつくりだすという協同の作業を通してサークル文化が伝えられるということが明らかになった。教師の力量形成には、学校文化や官製の研修等も影響を与えるが、自主的な教師サークルを通して伝えられる教師文化の力が大きな影響を与え、伝搬する。

研究成果の概要（英文）：

The formation of teacher's ability was seemed as the formation of the teaching style, and clarified by chasing the teacher's life history whether "Teacher culture" (for instance, culture of school culture and teacher's independent circles) etc. Teacher Culture influenced the formation of the teaching style.

It was clarified that the culture of the circle (For instance, the unit of regional study is jointly produced as educational technology and training was shared) gave the decisive influence to own teaching style formation on though the conclusion was not able to be generalized according to the interview to the teacher who belonged to a certain independent teacher circle. Especially, it was clarified to it that the circle culture was passed on through through the work of and cooperation of producing the fieldwork doing and the teaching plan together rather than written reports. The influence with big power of the teacher culture passed on through an independent teacher circle is given, and it propagates though the training of the school culture and government manufacture etc. also influence the teacher's ability formation.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	2,000,000	600,000	2,600,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：教育方法学・授業論

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：教師の力量形成、授業スタイル、ライフヒストリー的アプローチ、観の形成、

1. 研究開始当初の背景

本研究「教師の授業スタイルの形成と『教師文化』——ライフヒストリー的アプローチを通して」は、教師の力量形成のコアとなる授業スタイルの形成が、授業研究にかかわる「教師文化」(研究会、サークル等)との出会いによってどのように起こるのか、そのドキュメントを教師のライフヒストリーの中に位置づけながら明らかにしようとするものである。

授業スタイルを「その教師が授業を構想し、教材づくりや授業を行う際に見られる特徴のある『一貫性』」(森脇 2007)と定義しておく。本研究では、授業スタイルという概念を、授業実践経験の歴史に由来している側面に重点を置いて捉えている。つまり、授業スタイルは、個々の教師の授業実践史の中で形成され変容してきたものとして、通時的に理解されるべきだという立場を、ここではとっている。教師の力量形成にとって、授業スタイルの形成はきわめて重要な指標となる(森脇 同上)。ライフヒストリー的アプローチとは、教師の「語り」を一つの基本資料にしながらも、教師自身の実践記録や分析者の観察記録など、データを多面的に採りながら、教師としてのカリキュラム経験と授業変革の歴史を、授業事実のレベルで丹念に洗い出そうとする試みである。このアプローチによって授業スタイルの形成はいわば発生論的に明らかにされる。

教師のライフヒストリー研究は高井良健一(1995)が述べるように、1980年代の「新しい」教育社会学の誕生と密接に関連し、その課題意識は教師の個人史を教師文化や地域社会の文化史との関連でとらえる方向へと発展してきた。こうした研究の豊かな蓄積に学びながらも、筆者の問題関心は、日本語教師個人の授業変革史、とりわけ教師のカリキュラム経験(自らの授業実践のリフレクションによる再構築)と授業スタイルの変革の関係を明らかにすることにある。

ライフヒストリー的アプローチをとる理由は以下の通りである。授業は、本来、それを実践する特定の教師が実践経験の中で形成してきた見識に、深く根ざした営みである。つまり、授業の構想と実践において、目の前にいる学習者の状況をどう理解するか、授業の目的をどう想定するか、教材や学習活動をどう利用し組織するかということは、その教師のそれまでの授業実践経験の歴史に由来している面が大きい。言い換えれば、個々の授業には、教師がその都度、授業を自らの実践経験に由来するものとして構想し実践するだけの、個別具体的な必然性が見出せるはずである。しかし、従来の授業研究は、授業が目的とする能力形成や教科内容習得に、手段としてどのような教材や学習活動が有効か、という目的—手段関係を基本枠組みとした研究視点をとる傾向が強かった。そうした研究視点に基づいて、目的達成に対する手段の有効性を検証し、この目的—手段関係を「どの

教室にも通用する一般的な技術的原理」(佐藤学 1996)として提起しようとする一般化志向が、従来の授業研究の基本線であった。

しかし、近年教育方法学においては、授業の「技術主義的な把握」に対する再検討の機運が高まり、教師論としての教師のライフヒストリー研究とミクロな授業研究との間にクロスオーバー的な研究領域、すなわち「授業スタイル構築」を教師のライフヒストリーの文脈の中で理解しようとする研究領域が成立してきている(森脇 2004)。

教師文化とは、教員が形成してきた文化と規定しておくが、ここではその場として、授業研究にかかわる自主的なサークルから官制の教育研究部会のようなものまで、とりあえず広くとらえておきたい。これまで筆者は、学校文化との出会いにおける授業スタイルの確立をテーマとして挙げ、事例研究を積み重ねてきた(平成18~19年度科研費研究 基盤(C)「授業スタイルの形成と学校文化——ライフヒストリーアプローチを用いて」)。そこで明らかになったのは、学校文化との「出会い」が授業スタイルの変容に大きな影響を与えていることと同時に、自主的なサークルへの参加、研究会への参加が教師の授業スタイル形成にとってきわめて重要なインパクトを与えている事実だった。佐藤(2007)は、日本の教員の質を保証してきたものとして、明治以来の歴史的な伝統、大正自由教育以来のインフォーマルな専門家文化、そして戦後の学校の校内研修と実践研究を主にした専門家としての教師文化を挙げ、そのどれもが衰退してしまったことが教師の質の危機を招いていると述べる。近隣の四日市市においても、半官半民で行われてきた教科の研究会の衰退が教師の力量形成の場を奪っているとの複数の証言を得ている。

だがいったい日本の教師たちは専門家文化(教師文化)との出会いによって、どのような授業スタイルの確立をおこなってきたのか、その実態は明らかではない。

筆者はこれまでの事例研究の蓄積の中で、授業スタイルの生成と変容が、あるできごととの「出会い」によって起こっているのではないかという暫定的な仮説を持つに至っている。できごととは、これまでの自分のやり方が児童・生徒にまったく通用しなかったというような事件である場合もあるが、まったく新しい学校文化や教師文化との「出会い」というケースも多く見られた。

今回、焦点をあてたいと考えているのは、教師文化との「出会い」がいったいどのような経緯で起こるのか?その「出会い」がどのように個別の教師の授業スタイルに影響を与えていくのか、その具体的、個別的なケース事例を追いたいと考えている。

2. 研究の目的

まず授業スタイルの生成と変容においてどのような「教師文化」との出会いが影響を与えたか、

その個別事例研究を積み重ねたい。ある教師の自主的なサークルを選び、そこで活動している教師に、「教師文化」との出会いが自分の授業スタイル形成にどのような影響を与えたか、インタビューを主に、可能ならば授業参観、残されている授業記録などを用いて明らかにしたい。それが1、2年目の目標である。それらは個別教師のモノグラフとして記述されることになる。2、3年目の研究期間後半においては、サークル、あるいは研究会自体の流れも一方で押さえながら、「教師文化」そのものの意義と意味を具体的な事例に即して明らかにすると同時に、今日的な意味についても明らかにしたい。

(参考文献)

- *佐藤学、『授業研究入門』岩波書店、1996年、pp.120-121、
- *佐藤学「教員の質の保証をめぐる」教大協集会シンポジウムにて、2007年@福井大学
- *高井良健「欧米における教師のライフヒストリー研究の諸系譜と動向」『日本教師教育学会年報』第4号、1995年、pp. 92-109
- *森脇健夫「教師の力量としての授業スタイルとその形成」『学びのための教師論』勁草書房 2007年、pp. 167-192 *森脇健夫「授業をつくる教師の知をめぐる」『確かな学力と指導法の探求』日本教育方法学会編、図書文化、2004年、pp. 121-131

3. 研究の方法

研究の方法として第一点はライフヒストリーのアプローチにより、授業者の授業スタイルの形成過程を授業者自身の意図や意味づけとの関連でとらえることができ、教師個人の歴史的、文脈的な理解が可能になる。こうした研究結果としての事例は、具体性ゆえに、その事例に出会う他の教師に、事例と自らの授業実践経験を対照させて、自身の経験をふり返る契機を提供できる可能性をもちえる。事例のもつこの性格を、ある個別的な事例に出会った者が自らの経験との類似を見出せるという意味で、典型性と呼ぶならば、個々の事例研究が典型性を持ち得たとき、個々の教師にとっては充分意味をもつモノグラフになる。第二点は、事例研究の個別性を超えて授業スタイルの形成を核とした教師の力量に対してサークルや授業研究会などの教師文化がどのような役割を担ってきたのか、その意義、意味を再確認できることである。地域の教師文化のルネッサンスが教師の質の保証にとって必要不可欠であることを具体的な事例ケースをもとに根拠づけたいと考えている。こうした研究は、このままでは歴史の中に埋もれてしまうであろう「教師文化」の再興を促し、現職の教員の研修の在り方に一石を投ずることになるだろう。教師サークルに属する教師の授業の参加観察とともにライフヒストリーインタビューを行い、教師の授業スタイルの形成に教師文化がどのような影響を与えたかを明らかにする。

4. 研究成果

成果としては大きく分けると二つのことが上げられる。一つは全国規模の授業づくりに関するNPO法人の夏の研究集会のシンポジウム(2009, 2010)において、二人の有名なベテラン教師のライフヒストリーインタビューを行ったことである。インタビューの中で明らかになったことは、学校文化とともに学校以外において文化を吸収しながら自分の授業スタイルを形成していることであった。また、その授業スタイルは「観」の形成を同時に伴っているということであった。こうした公の場におけるライフヒストリーインタビューは、研究の当初には予定していなかったが、技術やシステムを「その人となり」あるいはライフヒストリーの中で意味づけることによって、より技術やシステムを理解できると多くの参加者が感じたことである。

もう一つはより小さな同人的サークルの果たす役割である。このことに関して広島にある教師の自主的なサークルに所属している4人の教師の授業参観、その報告の検討、またライフヒストリーのインタビューを行うことができた。

その中のSさんについては、授業についてのストップモーションによる検討会を行った。

Sさんがサークルに持ち込んだビデオは確かにストップモーション検討にかけられたが、それは、授業技術を云々するのではなく、Sさんの世界を理解するための方途であった。授業技術から学ぶやり方もあったが、むしろSさんがこれまで何を大事にし、これからどんな実践をつくっていきたいのか、過去と未来を結ぶ結節点としての現在としてこの授業を私たちは観た。Sさんの「観」が明らかにされ、授業の中で一瞬だったが、外輪さんの「観」にもとづいた願いが実現しているところを確認・共有することができた。

こうしたSさんの授業検討のように、教師文化を持つサークルにおける教師どうしの学びは、きわめて大きな影響をその教師に与える。またインタビューによって明らかになったのは、こうした授業検討だけではなく、サークルで一体となつての授業づくりの面においても大きな影響を与えていた。たとえばこのサークルでは地域学習をサークルのテーマにしているが、サークル単位でフィールドワークに出かけたり、その道の専門家を呼んだりしている。こうした経験の共有が基盤となって各々の地域実践構築に大きく貢献していることが明らかになった。

このことは、教師の自主的なサークルの参加教師の授業スタイル形成にとっての重要な位置を明らかにしているし、日本の教師文化の伝統がこうした自主的なサークルにおいて継承されている点も指摘しておく必要があるだろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 15 件)

1. 森脇健夫、康鳳麗、坂本勝信、和田明子、日本語教師の力量形成研究——線画の発達と「観」の形成——、三重大学国際交流センター紀要第 6 号、2011 年 3 月、pp. 53-63 (査読有)
2. 康鳳麗、森脇健夫、坂本勝信、日本語教師の授業スタイル形成としての力量形成研究—ライフヒストリー的アプローチを用いて—、鈴鹿医療科学大学紀要 17 号、2010 年、pp. 39-49 (査読有)
3. 森脇健夫、教師文化と「観」の変容、授業づくりネットワーク No. 303、2010 年、pp. 4-7 (査読無)
4. 森脇健夫、学びの共同体とは？、授業づくりネットワーク No. 305、pp. 10-12、2010 年 (査読無)
5. 森脇健夫「教授行為の発見」授業づくりネットワーク、No. 299、2010、06、pp. 13-15 (査読無)
6. 森脇健夫、図解！ライフヒストリーアプローチとは何か？、授業づくりネットワーク、No. 296、2010、03、pp. 4-7 (査読無)
7. 森脇健夫、無化のいきつく先は？、社会科教育、No. 609、2010、p78 (査読無)
8. 森脇健夫・根津知佳子・小幡肇、授業研究としての「アクションリサーチの試み」Ⅱ—「感性と言語の対話」プロジェクトを通して—、三重大学教育学部紀要、第 60 巻 (教育科学)、pp. 287-302 2009 (査読無)
9. 森脇健夫・康鳳麗・坂本勝信・小西和代、日本語教師の専門性とその形成——個別事例 (小西知代氏) の実践分析及びライフヒストリー研究から——、三重大学教育学部附属教育実践総合センター紀要 29 巻 pp. 11-16、2009 (査読無)
10. 坂本勝信、康鳳麗、森脇健夫、中学年の日本人児童の物語描写における「視座」の実態について—日本人大学生との比較を通して—、常葉学園大学研究紀要、No. 25、2009、pp. 205-213 (査読無)
11. 康鳳麗・森脇健夫・坂本勝信、中国人日本語教師の授業スタイル形成としての力量形成—ライフヒストリー的アプローチを用いた事例研究を通して—、鈴鹿医療科学大学研究紀要、No. 15、2008、pp. 19-28 (査読有)
12. 森脇健夫、授業の世界には「ゆっくり」と入る方がいい、授業づくりネットワーク、pp. 49-52、2008 (査読無)
13. 森脇健夫・根津知佳子・南田修司ほか、小規模特認校におけるアクションリサーチの試み I、三重大学教育学部附属教育実践総合センター紀要、第 28 号、pp. 13-17、2008 (査読無)
14. 根津知佳子・森脇健夫・南田修司ほか、小規模特認校におけるアクションリサーチの試み

Ⅱ、三重大学教育学部附属教育実践総合センター紀要、第 28 号、pp. 19-26、2008 (査読無)

15. 森脇健夫・小幡肇、授業研究としての「アクションリサーチ」の試み—小幡肇氏 (奈良女大学附属小学校) との協働による授業研究—、三重大学教育学部紀要、第 59 巻 (教育科学)、pp. 299-309、2008 (査読無)

[学会発表] (計 5 件)

1. 康鳳麗、森脇健夫、坂本勝信、日本語教師の授業スタイル形成としての力量形成—ライフヒストリー的アプローチを用いて—、日本語教育学会、2010 年 10 月 9 日、神戸大学
2. 森脇健夫、根津知佳子、教育実践の質的研究の射程とアプローチ—記述データによる観の照射可能性を求めて—、日本質的心理学会、2009 年 9 月 12 日、札幌
3. 康鳳麗・森脇健夫・坂本勝信、質的研究としてのライフヒストリー的アプローチによる日本語教師の力量研究、中部教育学会、2009 年 6 月 29 日、名古屋
4. 坂本勝信、康鳳麗、森脇健夫、日本人児童の文章表現における「視点」の実態—低・中・高学年児童と大学生の比較を通して—、日本語教育学会研究集会、2008 年 12 月 20 日、山口市
5. 康鳳麗、森脇健夫、坂本勝信、日本語教師の力量形成へのライフヒストリー的アプローチ Ⅱ—臨応的対応に焦点を当てて—、中部教育学会、2008 年 6 月 28 日、春日井市

[図書] (計 1 件)

1. 田中耕治、森脇健夫、徳岡慶一『授業づくりと学びの創造』(学文社) 2010 年、pp. 37-87

6. 研究組織

(1) 研究代表者

森脇 健夫 (MORIWAKI TAKEO)
三重大学・教育学部・教授
研究者番号：20174469

(2) 研究分担者

(0)

研究者番号：

(3) 連携研究者

(0)

研究者番号：